



の作品の中にはもはや失われて入手不可能のものもある。しかし今に残されているものの中には、名作・大作とは呼べないものの個々には大変まじめに作られ、芸術作品としてなかなか優れたものが少なくない。中でも特筆すべきは「白蛇伝」伝説で、後述するようにこの話は不思議と日本映画と縁の深い物語なのである。

やや話が遠回りになるが、「白蛇伝」伝説について少し触れておきたい。言うまでもなく、この妖怪白蛇にまつわるいわゆる白娘子伝説は、南宋の都臨安（現在の江蘇省杭州市）の名勝西湖を舞台にしたものである。その由来を述べた明田汝生の『西湖遊覧志』は、西湖の湖心に建つ雷峰塔の縁起譚として白娘子物語を説き起こしているが、その記述を見ると、明当時人々に知られていた伝説もやはり南宋時代の話になっていたようである（宋代都市の寄席で行われた語り物芸能の中に「雷峰塔」の名の演目があったことが、当時の様子を記した『武林旧事』や『夢梁録』などに見えるから、実際はそれ以前に白蛇故事は民間に流布していたらしい）。明馮夢龍の『警世通言』中の「白娘子永鎮雷峰塔」は、宋代語り物の種本、いわゆる話本の体裁で書かれた白話短編小説で、後に江戸の上田秋成の『雨月物語』に収められた「蛇性の淫」の藍本となったことでよく知られている。

ただ中国では『警世通言』以降、「白蛇伝」の物語は小説よりもむしろ芝居としての発展の道を歩んだ。白娘子故事を題材とした戯曲作品は陳遇全の「義妖伝」や方成培の「雷峰塔」など特に清代の南戯に多いが、今日最も知られ、また実際に上演される機会が多いのは京劇の「白蛇伝」で、わが国でもしばしば催される京

劇の公演には欠かせない題目である。

京劇を見てもわかるとおり、芝居となった「白蛇伝」は明代白話小説とはかなり異なった内容を持っている。『警世通言』の白娘子はいかにも不気味な存在で、姿は妖艶だが性は甚だ狡猾、魅入られたが最後逃れることのかなわぬ執念深さを具えている。美男の許宣の魂を奪うために取り憑き、それがために数々の災いをもたらし、遂には法海禪師の法力で取り抑えられる。物語の中の彼女のイメージは終始陰險な悪玉で一貫している。それに対し芝居の白娘子は、同じ蛇の精とはいえそのイメージは妖気をぶんぶんさせた、身の毛のよだつような妖怪然としたところがない。蛇の持つ執念深さは、むしろ愛する男に誠を尽くし、時にはそのため命をかけるほどの純情さ・ひたむきさとして描かれる。それに比べ法海和尚は、一人の恋路をあくまで邪魔しようとする悪玉で、物語中の役どころが小説とはすっかり入れ替わっている。そもそも上演を前提とする戯曲では、いかに妖怪の話といっても主人公があまりにおぞましい存在では芝居としての成り立たない。ならばいっそ人と妖怪との悲恋の話にしたほうがはるかによいと考えるのは自然であろう。このように中国では小説を戯曲に翻案する際、これと同様筋立てや人物のイメージを大幅に書きかえることは少しも珍しくない。

かくして「白蛇伝」故事は、原話に忠実な怪談風の白話小説型と、人と蛇の精の悲恋物語に変身した戯曲型に分かれ、二つの違った顔を持つことになる。面白いことに、「白蛇伝」のこの二つの異なった型は映画作品においても見事に受け継がれ、脚本家や制作者の方針によって対照的な「白蛇伝」映画を生み出すこと

となった。

日本の「白蛇伝」映画を古い順に見てゆくと、まず昭和二十八年大映が制作した「雨月物語」が挙げられる。監督は溝口健二。その名のとおりに上田秋成の原作を脚色した作品だが、中身は「蛇淫の性」とは別物である。時代設定は室町末期の戦国の世で、京の都に壺や皿などの陶器を売りに行ったある田舎男が、人品卑しからぬ女中連れの美女の言いつけのままに品物を屋敷まで届けると、思わぬ歓待を受けて引き留められ、遂にそのまま契りを結ぶ。故郷に残した妻子を案じつつ女の魔性に抗し切れずに時を経るが、ある日ふとしたきっかけで女たちが妖怪の化身であることを知り、ようやく元の家に戻ってくる、というもの。若き日の森雅之主演で、蛇の精に扮するのは何と京マチ子である。ストーリーの上ではほとんど何の関連性を見いだせないが、雰囲気は明らかに白話小説型で正しく「蛇淫の性」の持つ隠微さを醸し出している。恐らく当時としては珍しいかなりエロティックなシーンもある。蛇の精の恐ろしさを描くというよりは、罪の意識に苛まれつつ、煩惱から容易に抜け出せない人間の性をテーマとした作品と言うべきであろう。同年のベニス国際映画祭の最優秀外国作品賞を受賞した。なお同名の作品は大正末期にもあったらしい、本作品よりやや遅れて同名の映画が新東宝より制作発表されているらしいが、残念ながら両編とも未だに目にする機会に恵まれない。

日本製「白蛇伝」で最も人気を博した作品は、実は意外なことアニメーションである。昭和三十三年に東映が制作したカラー

長編アニメーション映画の第一作が「白蛇伝」で、各地の映画祭で受賞、日本初の本格的動画作品として海外でも認められた。まだ動画技術が未熟であった当時、ほとんど手書きのセル画を用い、制作に二年半を要したというから東映の意気込みが伝わってくる。

ストーリーは概ね芝居のそれに近いものだが、妖精となった蛇が昔許仙(宣)に飼われていたという話の発端と、法海和尚との戦いに敗れた白娘子が竜王の許しを得て真の人間に生まれ変わるという結末は無論原作にはない。児童向けの作品であるから白娘子本来の妖艶さは皆無、誠に愛すべき純情可憐な妖精である。原作「白蛇伝」の雰囲気からは程遠いが、これはこれでなかなか楽しめる。ついでに付け加えると、同アニメーションシリーズには「西遊記」もあり、第一作に比べ技術的はかなり進歩の跡が見られる。子供のための映画とは言え、当時の東映映画は中国の古典小説にそれなりの興味を抱いていたのか。

さらに二年後の昭和三十五年には東宝が当時流行の特殊撮影技術を駆使した「白蛇伝」物映画を発表した。題名は「白夫人の妖恋」。この映画は特撮技術よりも出演の俳優が興味深い。白夫人すなわち白娘子はかつて李香蘭の名で知られた山口淑子である。当時年齢的にはすでに盛りを過ぎていたかも知れないが、芬々たる艶麗さは些かも衰えておらず、白娘子役としては未だに彼女以上の女優は他に浮かばない。許仙(宣)は池部良。こちらは見るからに若く、その名を恣にした美男スターの面目躍如である。しかしこの二人にもまして印象深いのが白娘子の女中青青役の八千草薫。同時恐らく二十代半ばくらいであろうが、黒衣をまとい中

国風の鬢を結ったその愛らしさには比類がない。ともかくこの出演者の顔ぶれだけでも十分に一見の価値がある。

話のほうはどちらかといえば戯曲型に近く、原話と違って結末では二人はめでたく結ばれ胡蝶のように舞いながら空へ消えてゆくところで終わるが、特撮を売り物にしたため白娘子が妖術を用いるシーンなどは妙に恐ろしげな場面が挿入してあって、全体の印象・雰囲気は統一性が欠ける。演技のほうもどうも少しあつさりしすぎていて、「白蛇伝」の本領である執念のような物が感じられない、というのはいないものねだりというものであろうか。

日本映画ばかり話題にしてきたが、本家中国の「白蛇伝」はどうなのであろう。前に述べたように、ごく最近まで大陸中国・香港・台湾で発表された映画作品の中になかなか「白蛇伝」がない。そもそも京劇のような古典演劇の題目になるような作品は、最初から映画化される望みなどないのかも知れない、と思つていたが、さにあらず。香港映画の新作の中に「青蛇転生」というのを見つけた。「青蛇」の名には戸惑うかも知れないが、実は前記の二つの清代南戯では、白話小説に現れた魚の精青青は白蛇と同じく妖精となった青蛇にとつて代わられているのである。この青蛇は白蛇より妖力はやや劣るものの立派に一人前の妖怪で人を惑わす術を心得ている。一体どのような脚色かと楽しみて見ると、さすがに本家である。これに比べると和製「白蛇伝」映画の白娘子など可愛いものではないか、と思わず眩きたくなる。作品の内容はほぼ「雷峰塔」に沿ったものだが、ストーリーは紛れもなく戯曲型なのだが、立ち現れる白娘子は、人間の姿の時は絡みつ

くような粘着質の媚態で許宣を誘惑し快楽を恣にし、ひとたび正体を現せばぞつとするようなグロテスクな蛇身に変わつて意のままに人心を惑わす。妖力も実に広大、時に法海和尚もたじたとなるほどである。

古代から中国人のイメージの中にある蛇の妖怪とは、けだしこのような代物に違いない。晋葛洪の「抱朴子」には「蛇に無窮の寿有り」と見えて、蛇は動物妖怪の頭に据えられている。六朝の志怪には蛇精の話が極めて多く、大体は頗る食欲で美しい人と見れば男女かまわず誘惑する話である。そもそも「白蛇伝」などは中国怪奇説話の中では比較のおとなしい方である。万事淡泊を好む日本人にはこの種のべとべととした感触は容易に受け入れられないが、それでは中国オリジナルの味は最後まで味わえないのだろう。げに中国人とは何と即物的な心の持ち主なのであろう。